

『大乘玄論』に関する諸問題 —「一乗義」を中心として—

奥野光賢（日本 駒澤大学教授）

1. はじめに

嘉祥大師吉蔵(549-623)には、現存26部といわれる撰述書があるが¹⁾、この中『大乘玄論』5巻は吉蔵の最晩年の著作とされるもので、その書名が端的に示すように、三論学派を大成した吉蔵が般若空観・無所得大乘の立場から大乘仏教の主要な問題について論述した、いわば吉蔵による大乘仏教概論と目される重要な著作である。いまそ

1) 吉蔵の著作については、平井俊榮『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派』(春秋社、1976)第2篇第1章第1節『現存著作の大綱』pp.354-357参照。但し、現存26部といわれる吉蔵の著作の中には、『弥勒経遊意』や『大品経遊意』のように決定的にその真撰が否定されたものも含まれている。このことに関しては、伊藤隆寿『慧均撰『弥勒上下経遊意』の出現をめぐって—付、宝生院本の翻印』(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第35号、1977)、同『大品遊意考(続)—経題釈を中心に』(『駒澤大学仏教学部論集』第6号、1975)等を参照。

の全体の構成を示せば、次のようである。

卷第1……『二諦義』(10章)	卷第4……『二智義』(12章)
卷第2……『八不義』(6章)	卷第5……『教迹義』(3章)
卷第3……『仏性義』(10章)	『論迹義』(3章)
『一乗義』(3章)	
『涅槃義』(3章)	

こうした『大乘玄論』の構成について、日本平安後期の学僧、珍海(1092-1152)は『大乘玄論義科次第』において、次のようにいっている。

二諦義 八不義 仏性義 一乗義 涅槃義 二智義 教迹義
論迹義。

仏教有詮。詮謂二諦。諦正以中。中即八不。中為仏因。因是仏性。由性起行。行為一乗。行乃得果。果名涅槃。涅槃帶照。照乃二智。因智説経。経称教迹。教迹須通。通唯論迹。(『三論玄疏文義要』卷第一、大正蔵70.200a)

つまり、ここで珍海は、『大乘玄論』の義科は相互に関連しており、三論の教理は『大乘玄論』の科文の次第によって理解するのが一番便利であると主張していることがわかる²⁾。

2) 『大乘玄論義科次第』の記述については、前掲平井書第2篇第4章『三論教義に関する二、三の問題』pp.556-557参照。

事実、『大乘玄論』は日本においては、吉藏教学の綱格を余すところなく伝えた代表的論書として、研究・講説が続けられてきたのである。すなわち、玄叡(生没年不詳)が本書に準拠して天長六本宗書³⁾の一つ『大乘三論大義鈔』(大正蔵70、No.2296)を著わしたのを初め⁴⁾、珍海は本書に対する十科の質疑応答である『大乘玄問答』(大正蔵70、No.2303)、また本論で考察する『一乗義』のみを取り上げた『一乗義私記』(大正蔵70、No.2304)を著わしている。そのほか、珍海の『三論名教抄』(大正蔵70、No.2306)や『三論玄疏文義要』(大正蔵70、No.2299)、中観澄禅(生没年不詳)の『三論玄義檢幽集』(大正蔵70、No.2300)なども本書の影響を受けていることが指摘されている。このほか、東大寺図書館には多数の『大乘玄論』に関する注釈書が残されていることが報告されており⁵⁾、本書が日本における三論研究の大きな柱になっていたことが理解されるのである。

ところで、『大乘玄論』の記述には、先行する吉藏の著作との重複

- 3) 天長六本宗書とは、天長七年(830)に淳和天皇の勅命により、三論・法相・華嚴・律・天台・真言の6宗に対して各宗の要義を撰述・献上させた書の総称である。
- 4) 『大義鈔』では、自宗の宗致を次の十條にわたって述べているが、これが『大乘玄論』の義科の影響を受けたものであることは明らかである。すなわち、『大乘三論大義鈔』巻第1『摘夫根莖。凡有十條。八不義一。二諦義二。二智義三。方言義四。仏性義五。不二義六。容入義七。一乗義八。教迹義九。三身義十』(大正蔵70.123c)とある。
- 5) 平井俊榮『鎌倉時代の三論教学』(『金澤文庫研究』第269号、1982)参照。これによれば、東大寺図書館には以下のような『大乘玄論』に関する写本が所蔵されているという。

	年号	筆者	書名	冊数	目録番号
①	正嘉元年(1257)		大乘玄論私記上	1冊	函123—61
②	正安元年(1299)		大乘玄論第二決疑抄	1冊	函104—109
③	正和五年(1312)	樹叡	大乘玄論卷第一註釈	1冊	函104—113
④	正中二年(1325)	澄賢	大乘玄論引文鈔	1冊	函123—60
⑤	嘉暦二年(1327)	澄賢	大乘玄問答第十二	1冊	函123—95

が多いところから6)、その著者性をめぐっては古くから議論があり7)、また特に巻第2の『八不義』については近年、吉藏と同門である慧均(生没年不詳)の『四論玄義』にほとんど類似した記述が認められたため8)、現在の日本の学界では本書を吉藏の真撰に帰することについては慎重になりつつあるというのが実情である9)。しかし、そのよ

	書名	冊数	目録番号
①	大乘玄論文集抄	5冊	函104—102
②	大乘玄論第三註釈	3冊	函104—104
③	大乘玄論第二卷聽聞抄	2冊	函104—105
④	大乘玄論聞書	3冊	函104—106
⑤	大乘玄聞思記八不義	1冊	函104—107
⑥	大乘玄第三決疑鈔	1冊	函104—110
⑦	大乘玄論註釈	1冊	函104—114

- 6) 村中祐生『大乘玄論について』(『印度学仏教学研究』第14巻第2号、1966)参照。村中論文は以下のよ
うに述べる。『大乘玄論は、古来、三論教学の最も勝れた綱要書の一つとして講論がなされ、依
用尊重されたことが知られている。本書五巻は、二諦義・八不義・仏性義・一乗義・涅槃義・
二智義・教迹義・論述(義)より成る。そのうちすでに二智義については『今一卷与浄名玄宗卷
文言多同。』と、また『一乗義与法華玄同。故知取其要用編此玄章歟。習之』(『大乘玄問答』巻第
8、大正蔵70・609下)と指摘されておる。これを含め、本書には他の論疏の文と重複する箇所を
全体では49例を検出でき、これらの重複例を検討するだけでも、より多くの新たな問題を提供
しうるやに考えられる。大凡これを整理すれば、二諦義(三巻章)と重複する箇所は5例、中論疏
と7、浄名玄論と6、維摩疏と2、法華玄論と19、法華遊意と2、本書の相互の重複2例で、うち対
応の著しいものは、二諦義において二諦義(三巻章)・中論疏・浄名玄論、一乗義と『法華玄論』、
涅槃義と中論疏、二智義と浄名玄論である。このように重複対応は極めて著しく、義科を以て
各疏の要義要文を録して一書を編んだことは疑いえない。これについて、後人の編とするかの
説を一概に立てた人はなく、さりとて嘉祥大師の真撰と直ちに認定することはにわかには決し
かねる態のものようである。けれど、嘉祥大師自身の一書の編著の意図はなかつたとも断じ
えないのではあるまいか』
- 7) 『大乘玄問答』巻第一(大正蔵70.572c-573a)を参照のこと。
- 8) 三桐慈海『慧均撰四論玄義八不義について(1)―大乘玄論八不義との比較対照』(『仏教学セミナー』第
12号、1970)、同『大乘玄論の八不義―慧均撰八不義について(2)』(『仏教学セミナー』第17号、
1973)参照。
- 9) 前注(8)の三桐論文、および伊藤隆寿『大乘玄論』八不義の真偽問題(2)』(『駒澤大学仏教学部論集』第

うな一方、内容的に吉蔵の他の著作と重複する記述が見られたとしても、たとえば現代の諸学者も先行する自らの論文をまとめて一著にすることがあるように、重複する記述があるだけではその著者性は問えないとし、またたとえ「八不義」の吉蔵真撰が否定されたとしても、これがただちに『大乘玄論』そのものの吉蔵撰述否定に繋がるものなのか否かは、なお十分な検討が必要な問題であるとする根強い意見もある¹⁰⁾。

本稿は、『大乘玄論』巻第3「一乗義」に的を絞り、「一乗義」に見られる問題点を指摘し、今後の『大乘玄論』の著者性に関する研究の一助にしたいと思う。

2. 『大乘玄論』「一乗義」の構成

ここで「一乗義」全文について、私が気付いている限りの吉蔵の他の著作との対照表を示し(本論末掲載資料①～⑯参照)、若干のコメント

3号、1972)参照。

- 10) この点について、平井俊榮博士は、前注(1)書中において、次のように述べておられる。「これらの論文を参照する限り、「八不義」に関しては、これを吉蔵の真撰とすることについてはかなり否定的な意見であるが、それをもって『大乘玄論』そのものが吉蔵の撰述に関わるものではないとの確証を得るまでには至っていないものようである。全体としてみた場合、『大乘玄論』が吉蔵自身の親撰になるものか、あるいは弟子たちによる後世の編纂になるものかは別として、本書が吉蔵教学の代表的論書であり、その思想を最もよく表明するものの一つであることは、異論のないところである。確定的に本書が偽撰であるという証明も現在不可能であることを言えば、内容的に吉蔵の他の著作との間に重複がまみ見られたとしても、それは往々にしてあり得ることであり、一概に『大乘玄論』を吉蔵の著作目録から除外することはできないし、また、そうすべきではないと考えるものである。」(同書、p.356参照)。

をなしてみたい。対照資料から知られるように、「一乗義」全体が、吉蔵の『勝鬘宝窟』『法華玄論』『法華遊意』などの先行する著作と大きく重なりあっていることが理解されるであろう。後にも述べるが、全体的に見て「一乗義」の構成は、これら先行する吉蔵の著作を機械的に並べたような印象がどうしても否めない。

さて、それはともかく、まず最初に「一乗義」が『法華経』を「八軸」(大正蔵45.42b→資料①、44a→資料②)としていることについて、菅野博士は次のように指摘している。

さて、『大乘玄論』の吉蔵撰述説には疑念がある。その理由の一つに『法華経』を7巻とするか、8巻とするかの問題がある。吉蔵は一貫して、『法華経』を7巻としている。たとえば、『法華玄論』巻第4に「三車諍論紛綸由来久矣。了之即一部可通。迷之即七軸皆壅」(大正蔵34.389a)とある。その他、『法華義疏』巻第3(大正蔵34.482b)、『法華遊意』(大正蔵34.633b、639c、643a)、『法華統略』巻第1(卍統蔵1-43-1、7c)を参照。

ほぼ同時代の智顛の『法華玄義』巻第7上も「今仏靈山八年説法。胡本中事復応何窮。真丹辺鄙止聞大意。人見七巻謂為小経。胡文浩博何所不辨」(大正蔵33.765c)とあるように7巻としている。ところが、『大乘玄論』巻第3「一乗義」には、「一乗者。乃是仏性之大宗。衆経之密蔵。反三之妙術。帰一之良薬。迷之八軸冥若夜遊。悟之即八軸如対白日也」(大正蔵45.42b)、同「三車四車諍論紛綸由来久矣。了之則一部可通。迷之則八軸皆壅」(大正蔵45.44a)とあるように、8巻としている。とくに後者の例は、上に引用した『法華玄論』の文とほぼ

同文でありながら、わざわざ「七軸」を「八軸」に変えているのは、8巻の『法華経』が流行した、吉蔵より後の時代の影響を感じる¹¹⁾。

この菅野博士のご指摘はきわめて重要なものであり、私の意見もまったく同じものである。やはりこれは『大乘玄論』の成立を考える上で一つの大きな視点を提供する重要な問題であると思われる。

次に資料⑨の記述に注目していただきたい。「一乗義」のこの記述は、『法華経』が「正因仏性」を明かしていないとするならば、この意味はいかなるものか、との問者の問いに対して、著者(吉蔵?)がかかる問いを答える問者は『法華経』の意味を理解しておらず、『法華経』を注釈した『法華論』の七処には「正因仏性」を明かしていると答えている箇所である。『法華論』の七処に仏性を明かしているとは、吉蔵がその著書中でしばしば主張することであり、このことについてはかつて拙著でも論及したところであるが¹²⁾、いまあらためてそれらの例を以下に示してみると次の通りである。

A 『法華玄論』巻第1(大正蔵34.367b)

晚見法花論明仏性義有七文。今略引二。初積方便品唯仏
与仏究竟諸法実相。諸法実相者如来蔵法身之体不変故。
仏性亦名如来蔵。故云隱名如来蔵顕名為法身。大経云我

11) 菅野博士『『大乘四論玄義記』の基礎的研究』(『印度学仏教学研究』第57巻第1号、2008)

12) 拙著『仏性思想の展開—吉蔵を中心とした『法華論』受容史—』(大蔵出版、2002)第1篇第2章第2節「吉蔵の『法華論』依用の実態—七処に仏性有りの文をめぐって—」pp.58-76参照。

0者即是如來藏義。次第二文積法師品云、知仏性水不違(遠?)得成三菩提。此序方便品意竟。

B 『法華玄論』卷第3(大正藏34.388c)

問。何以知然。

答。法華無仏性文、而天親積法華論有七處明仏性。故知一乘是仏性異名。謂論主知名雖異而體是同。故就法華中明有仏性義。淺識之流迷名喪實、聞名異故謂實亦異。便言一乘非是仏性。

C 『法華遊意』(大正藏34.642b)

十者人語難依。聖語宜信。天親法華論七處明仏性。一者方便品云、唯仏与仏乃能究(竟)盡諸法實相。論云、諸法實相者謂如來藏法身體不変故。乃至積法師品云、知去仏性水不遠故。以十種文義往推、即知此經已明仏性。

D 『三論玄義』(大正藏45.5c-6a)

次別難五時。

問。若立五時有何過耶。

答。五時之說非但無文。亦復害理。(中略)次法華為同婦、應無所疑。但在五時之說。雖辨同婦、未明常住。而天親之論積法華初分、有七處明仏性之文。解後段壽量品、辨三身之說。斯乃究竟無余。不應謂為不了之教。

E 『勝鬘寶窟』卷下之末(大正藏37.80a)

問。若勝鬘是實說、法華拋教為方便者、則勝鬘是了義經、法華名不了、詎可然耶。

法華論云、此經正明因辨果。因則七處明仏性、果則三仏菩提。豈可言其不了。

F 『大乘玄論』卷第3「一乘義」(大正蔵45.43a)

問。此經未明正因仏性、此義何耶。

答。此人不得經味。法華論云、七処明正因性。今略出四処。諸法從本來常自寂滅相、此明自性住仏性。又云同入法性、此是仏性之異名。又云開示悟入仏之知見、論釈知見明仏性、普賢菩薩及授惡人記有正因性故。

ここで注意されるのは、『法華論』の「七処」といいながら、『大乘玄論』のみは『法華論』の文を指示しているのではなく、『法華經』本文をもってこれを指摘していることである。このことは前の考察の際、私も気づいていたことではあるが、その際は一応『大乘玄論』を吉蔵の著作として考察を進めたという経緯がある¹³⁾。しかし、改めていま読み直してみると『法華論』の七処といいながら、『法華經』本文をもって指摘していることはやはり奇異な感じが否めないことも事実なのである。またこれは伝写の段階でなされた可能性も完全に

13) ただ私もその当ても『大乘玄論』の著者性についての疑念は認識しており、注記において次のように述べている。「周知のように『大乘玄論』は、その著者性が問われている書であるが、決定的な偽撰説が提出されていない以上、一応本書では吉蔵の著作として扱う。但し、筆者も『大乘玄論』に関して、まったく疑問を感じていないわけではないことに関しては、本書第1篇第2章第1節「吉蔵の『法華論』受容の特色」の注(22)を参照していただきたい」(前掲拙著p.76、(注25)参照)。なお、その注(22)では次のような指摘をした。「『晚見法華論』の用例は、『法華玄論』以外では『大乘玄論』卷第3「一乘義」(大正蔵45・44下22行目)に見られるだけである。この『大乘玄論』卷第3「一乘義」の箇所は『法華玄論』卷第4「一乘義」(大正蔵34・388下以下)と大幅な対応関係があることが知られている。多くの『法華論』の引用のある『法華義疏』や『勝鬘宝窟』には一度も『晚見』の用例がなく、最晩年の著述とされる『大乘玄論』になって再び『晚見』の用例が出ることは、『大乘玄論』の著者性をめぐると問題からも興味深い事実である。今後の検討課題としておきたい。」(拙著p.55)

は否定しきれないことではあるが、『法華経』に通曉していたはずの吉蔵が、「常不軽菩薩」を「普賢菩薩」と誤記することは考えられないことである。ともかく、この箇所も前に菅野博士が問題にされた「八軸」「七軸」の点と共に本書の問題点として指摘することはできるであろう。

資料⑩、⑪は、一見して明らかのように『玄論』「一乗義」は『法華遊意』の記述をほぼそのまま取り込んだものであることが明らかである。続く資料⑫も『玄論』「一乗義」の記述が『法華玄論』のそれとそのまま対応したものであることが理解される。なお、この対応関係から、末光愛正氏は現行の大正蔵経所収の『法華玄論』には約680字の欠落があることを『法華玄論』写本の調査によって突き止められ、この約680字の欠落がのちに吉蔵をいわゆる「三車家」と見做す錯誤の発端になったことを指摘した、重要な箇所でもある²⁾。

さて、次に資料⑬～⑱に目を転じてみると、『玄論』「一乗義」の記述は、それぞれ『法華玄論』巻第4、巻第6の文をほぼ機械的に繋ぎ合わせたものであることがわかる。特に『大乘玄論』の成立という観点からすると、資料⑬に見える「晚見法華論」という記述が注意される。「晚見法華論」とは、「最近になって見た『法華論』」というほどの意で、『法華論』は吉蔵の法華解釈のキー・ノートとなったものである。「晚見法華論」の用例は、吉蔵の最初期の法華注疏である『法華玄論』に見られる以外は、この「一乗義」(大正蔵45・44下22行目)に見られるだけであり、「一乗義」が『法華玄論』巻第4「一乗義」(大正蔵34・388

1) 末光愛正「吉蔵の『法華玄論』巻第四「一乗義」について」、『印度学仏教学研究』第33巻第1号、1984)

2) 末光愛正「吉蔵三車家説の誤りについて」、『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第16号、1984)

下以下)と大幅な対応関係にあることは巻末の資料に示した通りである。多くの『法華論』の引用のある『法華義疏』や『勝鬘宝窟』には一度も『晚見』の用例がなく、吉蔵最晩年の著作とされる『大乘玄論』になって再び『晚見』の用例が出ることはいかにも奇異な感じがする。あるいは『法華玄論』を機械的に編集したためにこうした事態が起こったのではあるまいか。以上は憶測の域を出るものではないが、著者性に関する一つの疑問点として指摘することはできるであろう。

続く資料⑩の「一乗義」の文脈も、『法華玄論』巻第9のそれと大幅に対応していることは一目瞭然である。このように見てくると、その著者性はひとまずおくとしても、少なくとも「一乗義」の文脈を正確に理解するためには、対応する吉蔵の『勝鬘宝窟』や『法華玄論』、『法華遊意』といった先行する著作の前後の文脈を理解しておくことが必須であることは十分にご理解いただけたであろう。

3. おわりに

以上、『大乘玄論』『一乗義』と先行する吉蔵の著作との対照表を示しながら、「一乗義」の構成を瞥見してきた。本論末尾に付した対照表に明らかなように、「一乗義」は吉蔵の先行する著作の多くの文脈に依拠して成立しており、そこには機械的とも思われる繋がれ方も散見された。また、「一乗義」中には決定的証拠とは言えないまでも、かなりその著者性に疑念を抱かせるに十分な諸点も存することが明らかになったと思われる。電子テキストの普及によって、類似する文脈の検索が容易になった今日、さらなる原文対照を進めて『大

乘玄論』成立の真相に迫ってゆければと念願している次第である。

(本稿は、2009年2月28日、韓国・金剛大学校における『『大乘四論玄義記』とその周辺』と題する学術セミナーにおいて口頭発表した原稿を一部修正したものである。

◎ キーワード

『大乘玄論』, 『法華玄論』, 吉藏, 三論宗, 一乘義

[본 논문의 한국어역은 본 연구소 홈페이지에서 보실 수 있습니다.]

資料：『大乘玄論』一乘義対照表

※ 対応文献については以下の通りの略称を用いる。

『勝鬘宝窟』(T37)=SB、『法華玄論』(T34)=FX、『法華遊意』(T34)=FY

	『大乘玄論』卷第3『一乘義』(T45)	対応文献
①	一乘義三門一釋名門二出體門三同異門 釋名第一。一乘者。乃是佛性之大宗。衆 經之密藏。反三之妙術。歸一之良藥。迷 之即八軸冥若夜遊。悟之即八軸如對白日 也。(42b12-15)	→八軸については本論参照。
②	釋名者。唯有一理。唯教一人。唯行一 因。唯感一果。故名爲一。法華論云。一 謂同義。如來法身聲聞法身緣覺法身三乘 同一法身。故名爲一。乘者運出爲義。運 出有三種。一者以理運人。從因至果。如 大品云。是乘從三界出。到薩婆若中住。 二者以德運人。如法華云。得如是乘。令 諸子等喜戲快樂。三者以自運他。如涅槃 云。乘涅槃船。入生死海。濟度群生矣。 (42b16-23)	第三釋名門。…唯有一理。唯教一人。唯 行一因。唯感一果。故稱爲一乘也。又如 法華論。以何義故名爲一乘。謂同義故。 言同義者。如來法身。聲聞法身。緣覺法 身。以三乘人同一法身。是故三乘同名一 乘。所以言一。所言乘者。名爲運載。運 載有三。一者運人從因至果。如大品云是 乘從三界出。到薩婆若中住。二者以德運 人。令縱任自在。如法華云。得如是乘。 令諸子等喜戲快樂。三者以自運他。如涅 槃云。乘涅槃船。入生死海。運度衆生。 (SB3.40c19-41a3)
③	出體第二。一乘體者。正法中道爲體。 攝論云。性乘行乘果乘。中邊分別論云。 乘具五義。一乘本謂眞如佛性。二乘行即 福慧等。三乘攝謂慈悲等。四乘障謂智障 無明。五乘果即佛乘也。 唯識論云。乘三體六義。三體者。一自 性。二乘隨。三主得。六義者。一體如空 出離四謗。二者因謂福慧。三者攝一切衆 生。四者境界眞俗。五者障即皮肉心。六 者果謂無上菩提。(42b24-c2)	次中邊分別論明乘有五。一乘本謂眞如佛 性。二乘行即福慧等。三乘攝謂慈悲心。 引一切衆生悉共出生死。四乘障謂煩惱障 及智障。三界內煩惱名煩惱障。餘障一切 行解名爲智障。五者乘果即佛果也。 唯識論解乘有三體六義。三體同前。一自 性二空所顯眞如是也。二隨流隨順自性 流。福慧十地等法是也。三至果即隨流所 出無上菩提。及一切不共法也。六義者一 體是如如空出離四謗。二者因謂福慧。三 者攝攝一切衆生。四境界了眞俗脩二諦。 五障即皮肉心三障。六果謂無上菩提。 (FX4.390c6-17)
④	十二門論云。乘具四事。一者乘本謂諸法	又望于十二門論。乘具四事。一者乘本。

實相。二者乘主由波若導萬行得成。三者乘行餘一切行。四者果謂薩婆若。(42c3-5)

⑤ 法華論云。亦明三種。一者乘體。謂如來平等法身。即是佛性。二者乘果。謂如來大般涅槃。三乘緣。即是六度了因。此猶三種佛性。不說果果性者。果果性屬果門。境界性者。屬因門故。廣說有五。略說唯三也。(42c5-10)

問。乘以何爲體。答。經論雖種種說。不過三種。謂理行果。今以正法爲體。

問。理是不動云何名運出耶。答。以其不動故。能令衆生運出。別而論之。順忽爲運。得無生忍爲出。通論一一皆運出。因乘自運運他。果乘與理乘。自不運而能運他。

問。此經明乘。正以何爲體。答。若就因果用。以果爲宗。若就正法體。即以正法爲宗。今明若因果皆正法故。運故以正法爲宗。有人言。此經萬善爲乘體。有人言。以果萬德爲宗。有人言。境智爲宗。今明。就用非無此義。而不得乘深體故。以正法中道爲經宗。爲一乘正體。

⑥ (42c10-21)

問。三論學者恒彈破有所得義。云何稱用異說耶。答。若言破相爲宗。是有所得義。今中無所得。諸師義皆得皆非。得用不得體。異執永消。同歸一極。無執不破。無義不攝。巧用如甘露。拙服成毒藥也。(42c21-25)

問。大品明理教行果四乘。與今何異耶。答。彼經不明開權。與此爲異。

謂諸法實相。由實相生波若故實相爲本。即是乘境義。二者乘主。由波若故萬行得成故波若爲主。即智慧。三者乘助。除波若外餘一切行資成波若。四者乘果。乘此乘故得薩婆若也。(FX4.391a10-15)

法華論亦明三種。一乘體。謂如來平等法身。即是佛性爲乘體。又云佛乘者。謂如來大般涅槃。此即明佛果爲乘體。此隱顯爲異實無兩也。又釋汝等所行是菩薩道。及低頭舉手之善發菩提心修菩薩行。即是了因乃爲乘緣也。此猶是三種佛性義耳。乘緣謂引出佛性即了因也。乘體謂因佛性。乘果謂果佛性。不說果果性者。果果性還屬果門。不說境界性者屬因門故也。又廣說有五。略即唯三也。

(FX4.391a1-10)

問。三論學者恒彈破有所得義。云何今並用衆家異說耶。答。興皇大師製釋論序云。領括群妙申衆家之美。使異執冰銷同歸一致。以此旨詳之。無執不破無義不攝。巧用無非甘露拙服皆成毒藥。若專守破斥之言斯人未體三論意也。

(FX4.391b6-11)

問。勝鬘法華何異。答。法華會三乘。爲漸悟菩薩說。正對三乘。勝鬘爲頓悟菩薩說。不對聲聞緣覺。但對人說。與此爲異。(42c25-29)

- ⑦ 問。若爾法華究竟說。何故須涅槃教。答。失心子須涅槃。不失心子不須涅槃。但爲純根衆生故說是以大通智勝佛燃燈佛。不說涅槃。利根衆生故。(42c29-43a4)

- ⑧ 又此經明三事。一車二牛三僮從。車因果萬行萬德。牛亦通因果。中道正觀。離斷常垢。爲白牛。由正觀故。引萬行出生死。此即婆若導成萬行。
問。婆若是乘。云何喻牛耶。答。一法兩義。引導如牛。運義如車。餘不爾。運出故有車義。無引導之能故無牛義。界內爲僮從果地牛者。眞慧爲牛。六通無垢爲白牛。駕遊五道運出衆生。僮從者。即界外因爲僮從。(43a4-11)

- ⑨ 問。此經未明正因佛性。此義何耶。答。此人不得經味。法華論云。七處明正因性。今略出四處。諸法從本來常自寂滅相。此明自性住佛性。又云同入法性。此

問。何以知至法華即了悟不須涅槃耶。答。大經菩薩品云。如法華經中八千聲聞得受記成。大果寶。如秋收冬藏更無所作。故知至法華時即知佛性已得了悟也。又過去二萬日月燈明佛說法華竟便入涅槃。故知聞法華經已究竟悟。不須說涅槃也。又迦葉佛時雖有涅槃而不說之。故知法華是了義教。又壽量品云諸子有二。一不先心。二者先心。不先心者其法華時並皆得道。餘先心者待後唱滅方得領解也。

(FX1.367b2-11)

問。三引究竟何故復說涅槃。答。諸子有二種一不失心二者失心。不失心子聞三引究竟皆得領悟。餘失心子聞三引不悟。故方便唱滅爲說涅槃方得受道也。若爾涅槃最爲鈍根人說。

(FX2.373c12-16)

又此經明乘有三事。一車二牛三僮從。車通因果萬德萬行。牛亦通因果。中道正觀離斷常之垢爲白。由此觀故引萬行出生死如牛。此即婆若導衆行義也。

問。波若即是車云何復喻牛耶。答。一法二義分之。導引如牛運義名車。餘行但有資成運出。唯有車義而無引導之能故無牛義也。此是因地牛義也。果地牛者內德則取眞慧爲牛。外用宜取六通無垢爲白牛。駕之而遊五道運衆生也。僮從者果德爲車。則因爲僮從。因行爲車。則界外衆行爲車。界內行爲僮從。如索車中釋之。

(FX4.391a15-27)

→法華論七處については本論参照。

是佛性之異名。又云開示悟入佛之知見。論釋知見明佛性。普賢菩薩及授惡人記有正因性故。

問。有人言。此經未明常住。此義云何。

答。此是小乘氣分。此經諸法從本來常自寂滅相。此是法常住義。常在靈鷲山。明人常義。我淨土不毀。此名依報常義依報正報人法皆常。云何是無常耶。依論釋壽量品文。三身壽量法報二身是常。

問。有人言遣三而一存。此義爲得。答。此是有所得義。大品云。非三非一故名大乘。此經不可示。言辭相寂滅。此以超四句百非洞遣。強說明乘。三一爲二。非三非一爲不二。二不二爲眞。非二不二爲妙。二不二非二非不二爲眞。言忘慮絕爲妙。(43a12-28)

⑩ 三一開會凡有十門。一者開三顯一。二者會三歸一。三者廢三立一。四者破三明一。五者覆三明一。六者三前明一。七者三中明一。八者三後辨一。九者絕三明一。十者無三辨一也。

開三顯一者。開昔三乘是方便。示今一乘是眞實。故云開三顯一也。會三歸一者。會彼三行歸一佛乘。故云汝等所行是菩薩道也。廢三立一者。廢昔三教立今一乘教。故云於諸菩薩中正直捨方便但說無上道也。破三明一者。破其執三異之情。以明一乘之道也。覆三明一者。如來趣三一兩緣。當有三一之教。昔則以三覆一。今則以一覆三。三前明一者。未趣鹿苑說三之前。寂滅道場已明一實之教。謂三前明一也。三中明一者。從趣鹿苑說於三乘。佛乘第一。緣覺第二。聲聞第三。謂三中明一也。三後辨一者。三乘之後法華教門。以會彼三乘同歸一道。謂三後一也。絕待一者。如無言世界。外則無言無示。內則無慮無識。故不論三而已。即此爲佛事故。

第六論三一義。此經始末論三一開會。凡有十門。一者開三顯一。二者會三歸一。三者廢三立一。四者破三明一。五者覆三明一。六者三前辨一。七者三中明一。八者三後辨一。九者絕三明一。十者無三辨一也。

開三顯一者。開昔三乘是方便示今一乘是眞實。故云開三顯一也。會三歸一者。會彼三行歸一佛乘。故云汝等所行是菩薩道也。廢三立一者。廢昔三教立今一乘教。故云於諸菩薩前正直捨方便但說無上道也。破三明一者。破其執三異實之情以明一乘之道也。故云云唯一乘法無三也。覆三明一者。如來赴三一兩緣常有三一之教。昔則以三覆一。今則以一覆三。三前明一者。未趣鹿苑之說三前。寂滅道場已明一實之教。謂三前一也。三中明一者。從趣鹿苑說於三乘。佛乘第一。緣覺第二。聲聞第三。謂三中明一也。三後明一者。三乘之後法華教門以會彼三乘同歸一道。謂三後明一也。絕三明一者。如無言世界。外則無言無示。內則無慮無識。故

則復是一故。云絕待一也。無三辨一者。如香積佛土。彼土無有二乘名字。謂無三辨一也。但有清淨大菩薩衆。謂有一也。

前之五種。就義論一。後之五種。約時處。諸文不同教門差別。故開五也。

問。云何名會三歸一。答。若識會三歸一。先須知開一爲三。開一爲三者。昔指大乘之因說。爲小乘究竟之果也。今還指小乘究竟之果。即是大乘之因。故名會也。

問。小乘人謂是究竟。爲是迷因爲是迷果乎。答。實是大因。謂是小果故是迷因也。(43a28-b27)

① 問。以何義故明一乘是三乘中佛乘。復以何義明一乘非是三乘中佛乘耶。答。若明三乘。攝出世乘盡。故對二乘之方便。明佛乘是真實。故云唯此一事實餘二即非真。所以明一乘是三乘中之一也。就佛乘中。復開真應。昔爲二乘人說佛方便身。故佛乘是方便身。則以今教明佛身是真實故。真實之乘異方便佛。如師子坐長者異著弊垢衣長者。是以約今昔兩教。明佛有權實不同。是故一乘非三乘中之一也。問。此經中始末。或言佛以方便力示以三乘教。則三乘並是方便。又云唯此一事實餘二則非真。則二是方便。兩文相違。何以會通耶。答。此文猶是一義。無相違也。於一佛乘方便說三。次云一乘是實二是方便。如人手內實有一果方便言三果。次第論者。一菓是實二是方便。故方便說三及二。是方便猶是一義。不相違也。問。爲會三歸一爲會二歸一。答。此亦是一義。智度論云。於一佛乘開爲三分。如人分一斗米爲三聚亦得合三聚爲一聚。亦得言會二聚歸一聚。會三會二。猶是一義不相違也。(43b27-c19)

若究竟爲言。中道爲宗。論云性乘。若就

不論一三而已。即以此爲佛事故則復是一。故云絕一也。無三辨一者。如香積菩薩云。彼土無有二乘名字。謂無三辨一也。但有清淨大菩薩衆。謂有一也。

前之五種就義論一也。後五種約時處。前文不同教門差別。故開五也。

問。云何名會三歸一耶。答。欲識會三歸一。先須知開一爲三。開一爲三者。昔指大乘之因說爲小乘究竟之果也。今還指小乘究竟之果即是大乘之因。故名會三歸一也。

問。小乘人謂是究竟。爲是迷因爲是迷果。答。實是大因謂是小果。故是迷因也。

(FY.646c28-647a29)

問。以何義故明一乘是三乘中佛乘。復以何義明一乘非是三乘中佛乘耶。答。欲明三乘攝出世乘盡故。對二乘之方便明佛乘是真實。故云唯此一事實餘二則非真。所以明一乘是三乘中之一也。就佛乘中復自開真應。昔爲二乘人說佛方便身。故佛乘是方便身。即以今教明佛身是真實故。真實之乘異方便佛。如師子座長者異著弊垢衣長者。以約今昔兩教明佛有權實不同。是故一乘非三乘中之一也。

問。此經中始末或言佛以方便力示以三乘教則三乘並是方便。又云唯此一事實餘則非真。是則二方便。兩文相違。何以通會。答。此文猶是一義。無相違也。於一佛乘方便說三。次云一乘是實二是方便。如人手內實有一菓方便言三菓。次第考論者。一菓是實。二是方便。故說三說二並是方便。猶是一義不相違也。

問。爲會三歸一。爲會二歸一。答。此且猶是一義。智度論云。於一佛乘開爲三分。如人分一斗米爲三聚。亦得合三聚爲一聚。亦得會二聚歸一聚。會三會二猶是一義不相違也。

(FY.647b20-c11)

用爲談。萬善爲乘體。萬善之中。以般若爲體。報習兩善。取習因爲乘體。報因住生死不取。

問。若爾不應會人天五乘爲一乘。答曰。人天是報果而此乘體。有習因義故會。乃是增上緣義。別而爲論。有漏善非乘體。無漏善爲乘體。乘有二種。有漏善爲遠乘。無漏善爲近乘。乘有二種。一者動乘。二者不動乘。萬行爲動乘。如來藏佛性中道爲不動乘。

問。乘以運出爲義。中道佛性不運出。云何名爲乘體。答。以其不動故。能令萬善動出。亦令行者動出生死住彼涅槃。故名爲乘。小乘初教。以果爲乘。故言三車在門外。此是盡無生智果。大乘因與果爲乘。

問曰。若大乘因果爲乘者。何故經言於佛果上更無說一乘法事。答曰。此約自不運義。不言不運他。(43c19-44a5)

次同異第三。有人言。因成假爲乘用。一善不滿不成乘用。故合爲萬方有運用。例如椽椽等。非假則無有用。二云相續爲用。若實法念念自滅無有運用故言相續爲有用。三云相待爲一此中果一故因一。善既衆多。以此一果一於萬善。今明。萬善悉有運出之義。亦如百流一一自有向海義不以海一故百流爲一。

問曰。若非因成有力。復非相續。云何一念實法善有運出耶。答曰。以不運爲運。不續爲續故。終是相待爲本。是以相待有乘用。(44a6-15)

⑫

次引經文。

問曰。經云十方佛土中唯一乘法無二亦無三。云何名爲無二無三耶。答曰。有人言。無二者無聲聞緣覺二。無三者無偏行六度菩薩。又昔三乘皆是方便。今教別有一車異昔三也。

問。何以然。答。經云佛以方便力示以三

初明一乘義即釋會三歸一義。

問。經云十方佛土中唯一乘法無二亦無三。云何名爲無二無三耶。答。有人言無二者無聲聞緣覺二。無三者無偏行六度菩薩乘。又昔三乘皆是方便。今教別有一大車。異昔三也。

問。何以知然。答。經云佛以方便力示以

乘教。通以三爲方便。則以三爲方便。則以一爲真實。則會昔三乘歸今一實也。又云願賜我等三種寶車。昔既索三今便賜一。故索所不與。與所不索。則知。別有大車異昔三。小以文理推之。則有四車也。(44a15-25)

評曰。三車四車。諍論紛紛由來久矣。了之則一部可通。迷之則八軸皆塞。今以八文徵之。方見此釋爲謬。

第一文云。如來但以一佛乘故。爲衆生說法。無有餘乘。若二若三。此文次第列三乘也。但以一佛乘者。謂佛乘爲第一也。無有餘乘若二若三者。無有緣覺爲第二聲聞爲第三。以此文詳之。則唯有三車。則執四爲謬矣。

問曰。經常列三乘不作次次第。今何以然耶。答曰。以佛乘爲第一。緣覺爲第二。聲聞爲第三。此從上數至下。豈非次第耶。

問曰。何故作此次第耶。答曰。此正判三乘有無義也。初句明唯一佛乘。次句無二無三。明無餘乘。以唯一佛乘故。佛乘爲實。無二無三故。二乘爲方便也。又普門品中。亦列佛乘爲初。次及緣覺後明聲聞。與今同矣。

第二文云。尚無二乘何況有三。大論舉況者。皆舉勝以況劣。若言第三是偏行六度菩薩者。昔三乘中。佛乘爲勝二乘爲劣。若言第三。乃應舉三況餘二。云何舉二況第三耶。

三者偈云。唯此一事實餘二則非真。唯此一事者。即一佛乘實也。餘二則非真。緣覺聲聞。此二非真也。則以偈文。釋長行無二無三意。佛恐像末鈍根尋經不解故。轉勢頌之。令煥然易悟。

第四文云。諸佛語無異。唯一無二乘。全同前矣。

第五文云。但以一乘法教化諸菩薩。無聲

三乘教。既以三爲方便即以一爲真實。即會昔三乘歸今一實也。又云願賜我等三種寶車。昔既索三今便賜一。故索所不與與所不索。即知別有大車異昔三小。以文理推之即有四車也。

評曰。三車諍論紛紛由來久矣。了之即一部可通。迷之即七軸皆塞。今以八文徵之。方見此釋爲謬。

第一文云如來但以一佛乘故爲衆生說法。無有餘乘若二若三。此文次第列三乘也。但以一佛乘者謂佛乘爲第一也。無有餘乘若二若三者。無有緣覺爲第二。聲聞爲第三。以此文詳之即唯有三車。即執四爲謬矣。

問。經常列三乘不作此之次第。今何以

→「今何以」以下、大正藏『法華玄論』では約680字欠落あり。末光愛正論文参照。

聞弟子。此文最分明。既云但以一乘教化菩薩。則有菩薩也。無聲聞弟子。則無餘二乘也。

六者信解品云。密遣二人。

七者化城喻品云。世間無有二乘而得滅度。唯一佛乘而得滅度耳。

八者偈云。唯一佛乘息處故說二。

諸文甚多。略舉八證。此釋既非。則四乘義謬。會三亦失。復有人言。但有三乘。會三歸一者。歸三中佛乘。非三外別有一也。(44a25-b29)

評曰。若但有三乘。不違八證。尋經首尾。復害六文。佛以方便力示三乘教。則知。三乘皆是方便。云何會二方便歸一方便耶。又云。於一佛乘。分別說三。又云。於一佛乘。隨宜說三。又諸子索三。父皆不與。明無三可趣索。有一以賜機。若三中之一是實有者。諸子無所索。父無所賜也。又虛指門外明有三車。諸子出門無三可見。若三中之一。是實有者。父非虛指。子出應見。又三中之一是實者。則會二歸一。不名會三歸一。

問。立四則違八證。辨三復害六文。請會通之令無豪滯。答。世間淺識言不相違。

況復一切智人說應銜。又如來說八萬法藏乃至塵沙法門。尚無二言。況一經中應有兩說。以此推之。是知。失在學人。何復敢嫌大聖。(44b29-c14)

今所明者。八證六文猶一意耳。且會二文餘皆可領。一云方便說三。次云唯一是實餘二非實者。唯一佛乘欲引導衆生故。方便說三。考實而言。唯一佛乘。是實餘二非真。是故說三說二。猶一意耳。假設近喻以況遠旨。如父手中唯一一菓。欲引諸子說一菓爲三菓。考實而論。唯一菓無二菓。是故二文無相違也。以三二既明。會義可領。晚見法華論。釋十方佛土中尚無二乘何況有三。與今意同。論云。此是

說三。次云唯一是實餘二非真者。唯一佛乘欲引導衆生故方便說三。考實而言唯一佛乘是實。餘二非真。是故說三說二猶一意耳。請設近喻以況遠旨。如父手中唯一一菓欲引諸子說一菓爲三菓。考實而論唯一菓無二菓。是故二文無相違也。以三二既明會義可領。晚見法華論。釋十方佛土中尚無二乘何況有三。與今意同。論云

遮者。明無二乘涅槃唯佛究竟無上菩提有大涅槃耳。此但明無有二乘唯有佛乘。不言無偏行六度菩薩。故光宅失旨也。

(44c14-26)

次論四句。

問。會三歸一。破三歸一。開三顯一。廢三立一。有何異耶。答。會三歸一者。乃會教會行會緣。言會教者。昔開三乘五乘之教。並為顯一道。所表之道既一。能表之教亦復言一。故一切教皆名大乘教也。會行者。汝等所行是菩薩道。如來昔說有三行者。為趣一道。故令修三行。所期之道無二。能趣之行豈三耶。所言會人者。如來出世。本為教菩薩。不教餘人。三所行既是菩薩道。能行之人。皆成菩薩也。故文云但為教菩薩無聲聞弟子。會教正是一時。會行及人。遠令至佛也。

問。會有幾種。答。自有融會稱會。自有會歸稱會。如向明也。融會稱會者。既會三歸一竟。緣即疑云。三若歸一。何故說三。是故釋言。昔以方便故說三。今以如實故說一。此是融會今昔三一之義。亦名會也。若是會歸之義。正就三行。融會之義。宜就教門。所以然者。若會三因同歸作佛。如是之義。會行為正。不用教門作佛故。教非會歸也。(44c26-45a15)

問。有人言。此經未明佛性。但明緣因。復言。覆相明常。此義云何。答。乃是成論淺悟之徒。有如此失。值大寶而不取。遇深經而不求。豈異弱喪與窮子反走於舍宅。此經云。常在靈鷲山。常在此不滅。劫火燒盡時。我淨土不毀。既言依正兩報常住。又法華論。云釋壽量品文。有法身壽量報佛壽量化身壽量。豈非常耶。又處處明法性。法性是佛性之異名。身子言。我等同入法性。云何如來以小乘法而見濟

此是遮義。是遮者明無二乘涅槃。唯佛究竟無上菩提。有大涅槃耳。此但明無有二乘唯有佛乘。不言無偏行六度菩薩乘。故光宅失旨也。

→「晚見」の用例

次論四句。

問。會三歸一。破三歸一。開三顯一。廢三立一。有何異耶。答。會三歸一者有會教會行會緣。言會教者昔開三乘五乘之教並為顯一道。所表之道既一能表之教亦復無二。故一切教皆名大乘教也。會行者。汝等所行是菩薩道。如來昔說有三行者。為趣一道故令修三行。所期之道無二。能趣之行豈三耶。所言會人者如來出世本為教菩薩。不教餘人。三人所行既是菩薩道。能行之人皆成菩薩也。故文云但為教菩薩無聲聞弟子。但會教正是一時。會行及人遠令至佛也。

問。會有幾種。答。自有融會稱會。自有會歸稱會。若會歸稱會如向所明也。融會稱會者。既會三歸一竟。緣即疑云。三若歸一何故說三。是故釋言。昔以方便故說三。今以如實故說一。此是融會今昔三一之義亦名會也。若是會歸之義正就三行也。融會之義宜就教門。所以然者。若會三因同歸作佛。如此之義會行為正不用教門。作佛故教非會歸也。

(FX4.388c20-389b11)

度。又方便品初明佛知見。即是佛性。乘有三種。理乘即是中道佛性。行乘即是緣因佛性。果乘即是果佛性。因因性境界性屬正因。果果性屬果性。故不開五性也。

(45a15-28)

⑬ 索車義第二。

問。爲是三人索三。爲是二人索三耶。
答。舊經師云。三人索三車也。何以知然。下文云。爾時諸子各自父言。願賜我等三種寶車。故知。三人索三。又所以索三者。實無三乘。但昔於一佛乘方便說三。以是方便行所以索也。

評曰。今以十義推之。不應有三人索也。一者本以三車譬於三果。故云。今此三車皆在門外。二乘人。出門外至許車處。覓果不得。可言索果。菩薩之人。未至許處覓佛果不得。何有索佛果耶。

(45a28-b8)

⑭ 答曰。原索意者。本爲昔有今無。是故索耳。若今昔俱有者。必不索也。尋大小乘經始終。皆明佛乘是有。如初教明佛乘是有。至法華亦明佛乘

是有。以始終明佛乘是有故不索也。

(45b8-12)

⑮ 問。乘以何物障。答。大論既以六度爲大乘體。六弊即是障也。若取乘出義。即著生死以爲障。若取乘廣義。即以狹劣爲障。若以出世無所得六度故能動出。即以有所得六度爲通障。六弊爲別障。

(45b12-17)

⑯ 譬中云三車在門外者。此總相說耳。依昔義者。二車在三界正使門外。佛果在習氣無知門外。二乘人。以正使限域爲門。佛以無知習氣限域爲門。昔說二乘人盡無生智在三界正使門外。今二乘人斷正使盡而不見車。是故索耳。昔說佛果在習氣無知門外。今菩薩斷正使盡。習氣無知即盡。即便成佛亦無索也。(45b17-24)

第三明索人。

問。爲是三人索三。爲是二人索三耶。
答。舊經師云。三人索三車也。何以知然。下文云爾時諸子各自父言。願賜我等三種寶車。故知三人索三。又所以索三者。實無三乘但昔於一佛乘方便說三。以是方便所以索也。

評曰。今以十義推之。不應有三人索也。一者本以三車譬於三果。故云今此三車皆在門外。二乘人出門外至許車處覓果不得。可言索果。菩薩之人未至許車處覓佛果不得。何有索佛果耶。

(FX6.408a14-24)

答曰。原索意者本爲昔有今無。是故索耳。若今昔俱有者必不索也。尋大小乘經始終皆明佛乘是有。如初教明佛乘是有。至法華亦明佛乘是有。以始終明佛乘是有故不索也。(FX6.408b15-19)

次論乘障。

問。乘以何物爲障。答。釋論既以六度爲大乘體。六弊即是障也。若取乘出生死義即著生死以爲障。若取乘廣義即以狹劣以爲障。若以出世六度無所得故能出。即以有所得六度爲障。六弊即是別障有所得即是通障也。(FX4.392a25-b1)

四者譬中云三車門外者。此總相說耳。依昔義者二車在三界正使門外。佛果在習氣無知門外。二乘人以正使限域爲門。佛以無知習氣限域爲門。昔說二乘人盡無生智在三界正使門外。今二乘人斷正使盡而不見車。是故索耳。昔說佛果在習氣無知門外。今菩薩斷正使盡習氣無知則盡即便成佛亦無索也。(FX6.408c24-409a2)

⑰ 問。何時索車耶。答。舊云。得羅漢已後。法華之前有索。

⑱ 又難。若未說法華已生疑者。身子得果竟。應言我今自於智疑惑不能了。爲是究竟法爲是所行道。豈待法華方有此釋索。故今明。待法華方索也。(45b24-28)

⑲ 次論一乘壽量果。

有人言。未明常住。又難。若度五百而未常。亦應未度五百。即應是常。若未度非常則已度。是常矣。又經云佛度五百而言未度者。佛昔明度三百亦應未度。若昔言度三百佛實度者。今亦應實度五百也。若順經故遂度五百。則已免三相。何事非常。(45b28-c5)

今所釋者。壽量品亦具明三身。法華論云。王宮現生伽耶成佛。名爲化佛。久已成佛乃至復倍上數故名爲報佛。如實知見三界之相無有生死。若退若出明法身佛。但三身不同。若法華論明三身者。以佛性爲法身。修行顯佛性爲報佛。化衆生義爲化身。若攝大乘論所明。隱名如來藏。顯名爲法身耳。此二皆名法身。就應身中自開爲二。化菩薩名報身。化二乘名化身。或云。化地上名報身。化地前名化身。地論法華論。是菩提留支所出。攝大乘。是真諦三藏所翻。此三部皆天親之所述作。而明義有異者。或當譯人不體其意。

今欲融會者。會衆經及論。或二身或三身或四身。

今總束爲四句。一合本迹。如金光明經。但辨一本迹也。故云佛眞法身猶如虛空應物現形如水中月。二開本開迹如此。大凡論明有四佛。開本爲二身。一法身二報身。法身即佛性。報身謂修因滿迹。爲二身化菩薩名舍那。化二乘名釋迦也。三開本合迹。如地論法華論所明。開

問。何時索果耶。答。舊云。得羅漢已後。法華之前。此時有索。

(FX6.410a24-25)

又難若未說法華已生疑者。身子得果竟已應云我今自於智疑惑不能了。爲是究竟法爲是所行道。豈待說法華方有此唱。

(FX6.410b9-11)

論壽量佛義(FX9.437a4)

難曰。若未常住則未度五百何故聞度五百而即信。明已成而未受。又難若度五百而未常。亦應未度五百即是常。若未度非常。則已度是常矣。又經言佛度五百。而言未度者。昔明佛度三百。亦應未度。若昔言廣三百佛實度者。今亦應實度五百也。若順經故遂度五百。則已免三相。何事非常。

今所釋者。壽量品亦具則三身。法華論云。王宮現生伽耶成佛名爲化佛。久已成佛乃至復倍上數故名爲報佛。如實知見三界之相。無有生死若退若出。明法身佛。但三身不同。若法華論明三身者。以佛性爲法身。修行顯佛性爲報身。化衆生義爲化身。若攝大乘論所明。隱名如來藏。顯名爲法身。則此二皆名法身。就應身中自開爲二。化菩薩名報身。化二乘名化身。或云化地上名報身。化地前名化身。地論法華論是菩提留支所出。攝大乘是真諦三藏所翻。此三部皆天親之所述作。而明義有異者。或當譯人不體其意。

今欲融會者。衆經及論或二身或三身或四身。

今總束爲四句。一合本合迹。如金光明但辨一本一迹也。故云佛眞法身猶如虛空應物現形如水中月。二開本開迹。如五凡夫論明有四佛。開本爲二身。一法身二報身。法身即佛性。報身謂修因滿顯出佛性。開迹爲二身。化菩薩名舍那。化二乘名釋迦也。三開本合迹。如地論法華論所

本謂二身。謂佛性是法身。佛性顯爲報身。四開迹合本。如攝大乘論所明。合佛性及佛性顯皆名法身。開迹身爲二。化菩薩名舍那。化二乘名釋迦。

(45c5-28)

此皆經論隨義說之不違。亦皆不體其意故起諍論耳。

若常無常者。別而爲言。法應二身爲常。化身無常。通而爲言。三身俱常俱無常。化身以大悲爲體故是常。法身有隱顯故。義說無常。應身始起義。是無常。金光明經云應化二身無常者。開迹合本。

(45c28-46a4)

問。三身有幾名耶。答。經論不同。法身舍那身釋迦身。亦名法身報身化身。亦名法身應身化身。又名佛所見身菩薩所見身二乘凡夫所見身。

法身亦名自性身。又名法性身。

問。若如是者應有六身八身。應有一佛身本迹二身。何故但明三身耶。答。依法華論。二身爲自德。化身爲化他德。攝論法身爲自德。二身爲化他德。若爾法身爲自德。化身爲化他德。

應身亦自亦化他。故立三身。亦可。法身爲體。報身爲相。化身爲用。體相用故立三身也。(46a4-14)

明。開本謂二身。謂佛性是法身。佛性顯爲報身。四開迹合本。如攝大乘論所明。合佛性及佛性顯皆名法身。開迹爲二。化菩薩名舍那。化二乘名釋迦。

此皆經論隨義說之。悉不相違。衆師不體其意故起諍論耳。

問。常無常云何。答。亦四句。開本合迹即是開常合無常。合本開迹合常開無常。本迹俱開即常無常俱開。常有法報二身。無常有應化兩佛。本迹俱合即常無常俱合也。

問。經說云何。答。華嚴梵網像法決疑大涅槃及法華信解品。此等諸文皆明法身常應化身無常。與攝大乘論同。法華壽量品可具二義。壽命無量劫久修業所得。此是報佛。即名常樂法身也。純化菩薩名爲舍那者。如化千世界微塵菩薩無有凡夫二乘。此可名舍那。無常身也。若化二乘及三乘雜衆名釋迦。化佛也。檢衆經與諸論皆不相違也。

問。三身有幾名耶。答。經論列名不同。或法身舍那身釋迦身。又名法身報身化身。又名法身應身化身。又名佛所見身菩薩所見身二乘凡夫所見身。

問。此等名字出何文耶。答。初出梵經。次出像法決疑金剛波若論。次出攝大乘論說。次出涅槃日喻品。三時短長之異如佛菩薩二乘所見不同。經說異名意猶一也。

問。何故但明三身。不多不小耶。答。若就法華論明三身者。佛性隱顯爲二身。化他爲化身。二身爲自德。一身化他德。又約攝大乘論明三身義。員不得多小。法身爲自德餘二身化他德。

(FX9.437a13-c9)

Abstract

Some Problematics on the
Dàshèng xuán lùn(大乘玄論)

— especially concerning the chapter of One Vehicle (一乘義) —

Okuno Mitsuyoshi

It has long been assumed that Jí zàng(吉藏, 549-623) composed the *Dà shèng xuán lùn*(大乘玄論) at the final stage of his life. As its title shows, it might be seen as a sort of introduction to Mahā-yāna Buddhism, since it deals with many vital topics of Mahā-yāna Buddhism from the characteristic viewpoint of Sān lùn school(三論宗). We could somehow account for the fact that Jí zàng often (may be too often!) referred, in this treatise, to the issues that he had already discussed in his earlier works. However, it seems very curious that in his treatise, the *Sì lùn xuán yì*(四論玄義), Huì jūn(慧均), who belongs to the same lineage as Jí zàng, gives similar statements to those in the second chapter on Eight Negations(八不) of the *Dà shèng xuán lùn*. Such evidence suffices to pose a question to the authorship of the *Dà shèng xuán lùn*.

I should also like to point out some problematics and characteristics of this treatise through the analysis of the concordance of its third chapter on One Vehicle(一乘義).

● Keywords

Dacheng xuanlun, *Fahua xuanlun*, Jizang, Sanlun school, the chapter of One Vehicle

2009년 5월 15일 투고

2009년 6월 6일 심사완료